

1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2892300050		
法人名	社会福祉法人 寿光会		
事業所名	グループホームりんどうの里		
所在地	兵庫県三木市志染町四合谷字伊賀ノ垣341番地		
自己評価作成日	平成24年5月31日	評価結果市町村受理日	2012年7月31日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者を地域で暮らす生活者と捉え、地域の人々との交流や外出の機会を積極的に行っている。行事(正月・節分・お盆・地域の春祭り・お彼岸・餅つき等)を回想法として取り入れながら認知症状の進行が緩やかになるよう自律支援の暮らしづくりを取り入れている。職員研修においては、併設の職員と協働しながら認知症ケア、リスクマネジメント、看取り介護等の知識を習得し、緊急時の対応としては、行方不明者捜索マニュアルを作成し、安全かつ安心な暮らしづくりを考えている。医療面においては、併設の看護師との24時間オンコール体制と協力医療機関との連携による健康管理を行っている。家族へは、毎月お便り(入居者の近況報告)を送付し、細やかに家族との連携を図っている。職員には、キャリアアップを目指すよう資格取得の補助制度により人材育成に努めている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.hyogo-kai.go.com/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人福祉市民ネット・川西		
所在地	兵庫県川西市中央町8-8-104		
訪問調査日	2012年6月15日		

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所はまだ開設1年を迎えたところであるが、母体法人はすでに、特養、ケアハウスを運営し地域福祉への貢献事業を展開している。所在地の三木市市街は高齢化が進み、認知症への支援強化は急務ともいえる中で、立ち上げから短い期間での環境整備、利用者の安定した生活維持確保は、職員の意欲と努力の成果であろう。職員は利用者一人ひとりに丁寧に向き合い、利用者主体の普通の生活を前提に、黒子の立場で見守り、さりげない支援に努めている。そしてそのことが利用者の生き生きした表情となって表れたり、そこから利用者同士の会話や交流が生まれ、助け合える関係にも発展している。今後利用者の状態低下は避けられないであろうが、職員のやる気を育み、チーム力を活かした基盤作りを法人共々取り組んでいかれることで、あらたな地域貢献ともしてほしい。利用者や家族が望む限り住み続けられ、今の利用者のおだやかな表情がいつまでも続くことを期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および第三者評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念を毎朝唱和し、共有して実践出来ている。	職員は、法人理念として人生の先輩である利用者に、敬愛の心で一人ひとりの気持ちに寄り添う、ケアの誠実な実践を目指している。具体的取り組みとして、毎月各ユニット毎に理念をベースとした目標を掲げ、チームとしてのケアの共有を図っている。	今回の評価を、グループホームとしての方向性を明確にする機会とされ、独自の理念を職員間で検討されてはいいかが。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日常的な交流ではないが、地域のボランティアや小学校・幼稚園と交流は行っている。	法人として近隣の自治組織や幼稚園、小学校等との関係性は築いてきており、芋ほりや運動会等の行事に参加、交流し、一緒に楽しむ機会を得ている。法人を通してのボランティアの参加もあり、今後さらに双方向の交流機会を増やしていきたいとしている。	運営推進会議を通じての情報収集を行い、グループホームとしての積極的な働きかけを望みたい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	現在は活かしているとは言えない。今後活かしていけるようにしたい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に一回運営推進会議を行い、サービス向上に活かしているが、更なるサービス向上に活かしていく必要がある。	事業所からは、グループホームでの利用者の日常の様子などを主に報告している。地域代表者や家族からは、利用者の普段の様子についての質問や意見が多く、事業所は、利用者の表情がよりわかる写真を活用して、身近に感じてもらうことを検討している。	ホームの周知だけでなくとどまらず、地域資源としてのホームの活用やそのための発信等、運営推進会議を活かす工夫を検討されてはどうだろうか。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	認定調査や事故報告などで市役所と連携を取り合い、協力関係を築くようにしている。	これまでの法人としての協力関係もあり、事業所開設にあたっては、事務手続や制度等の情報交換を持つよう働きかけを行っている。今後も継続して、事業所からの情報提供を行っていく考えである。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	施設内研修に参加し、正しく理解し実践出来ている。	原則、日中は施錠は行わず、職員は利用者の行動に添った付き添い、見守りに努めている。職員は法人内での委員会に出席し、事例検討による施設内研修を通じて学んでいる。日々のミーティングでも個々の利用者におけるケアの実践状況を検討し、共有を図っている。	
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待について施設内研修があり、虐待が見過ごされないよう職員間で注意を払い、防止に努めている。	職員が施設内研修に出席し、学ぶ機会を持っている。職員の利用者への普段の話し方、特に誘導の際の声かけについては注意している。職員間での言葉による虐待の有無について、さらに意識統一を強化していきたいとしている。	

自己	第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(7)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度の全てを理解するまでには至っておらず、活用して支援は来ていない。	職員への制度内容に関する研修はまだ未実施で、理解や周知は不十分といえる。現在、制度を活用している利用者が1人、又支援が必要と思われる利用者もいることから、家族への説明や支援への働きかけ、事例を通しての職員研修も検討していきたいとしている。	早急な実施を望みたい。
9	(8)	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結・解約・改定時などには十分説明を行い、納得してもらえていると思われる。	毎月の介護保険利用料だけでなく、生活上必要な費用や医療に関する費用など具体的に説明している。利用者が安心して生活するための家族の協力の必要性も伝え、納得を得るまで時間をかけ丁寧な説明を心がけている。今年度改正時は、説明会を開催し家族の理解を得た。	
10	(9)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時や連絡時に意見や要望を聴き、運営に反映させている。	家族来訪時には、こちらから利用者の様子を報告することで、気軽に相談してもらえるよう声かけしている。まだ開設間もないせいか、利用者、家族からの意見等は特に無いが、家族会の設置も検討していきたいとしている。	家族同士の交流機会など、気軽に集える場があってもいいと思われるので、検討を期待したい。
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	施設長との面接があり、個別に意見等を話し反映させている。	管理者はミーティング等で、職員からの提案や意見を積極的に出してもらおう働きかけを行っているが、意見は少ない。今後は職員の積極性や主体性をより引き出すためのこまめな働きかけ等が必要と考えている。施設長は自ら職員と面談し、話しを聞く機会を設け、反映に努めている。	職員がより主体的に取り組める体制の整備を期待したい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	施設内研修で就業規則についての勉強しており資料は各自配布されている。又各ユニットごとに毎月目標を立て、目標に向かい向上心をもって働いている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修を受ける機会がある。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	他施設の見学に行ったり、研修時などに交流がある。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援				
15	○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人の意見をしっかり聞き、安心できる関係作りが来ている。		
16	○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族の意見も面会時、連絡時に耳を傾け関係作りが来ている。		
17	○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	面会時や連絡時などに家族の意向を聞き、本人を含め支援をしている。		
18	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	共に生活する者同士の関係が来ている。		
19	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	来ている、共に支えていく関係が築けている。		
20	(11) ○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	来ている、本人の気持ちを大切にして支援に努めている。	利用者の生活歴等の情報収集はされているが、まだ十分とはいえない。日頃の利用者の様子から思いや要望をより汲み取るよう努め、家族の理解や協力がこれまで以上に得られるよう、働きかけを行っていきたいとしている。	
21	○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の人間関係を理解し、孤立しないようレクリエーションの参加や食堂のテーブル配置にも気を配っている。		

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	現在利用終了した人がいない為分からない。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人本位に検討し、意向の把握に努めている。	職員は利用者個々の個性や習慣等を把握したうえで一人ひとりに寄り添い、その人を知ることから理解を深める努力をしている。本人のペース、主体性を重視することを職員間で共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	共に過ごす中や家族からの聞きとりなどで把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	出来る限り利用者に寄り添い、共に過ごし現状の把握に努めている。		
26	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	必要な関係者と話し合い、本人がより良く暮らせるよう、介護計画を作成している。	本人の楽しい事、得意な事が生活の中で自然に取り組み、その人らしく落ち着いて過ごすことのできる計画となるよう心がけている。本人からの話しや思いを組み取って家族の意向も参考に相談し、反映するようにしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケア記録に入力し、情報の共有をして見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時々ニーズに対応はしているが、柔軟かどうかは分からない。		

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	レクリエーションなどには来てもらっているが、その他の地域資源は十分に把握出来ておらず活用できていない。		
30	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	嘱託医(内科)の週一回、(精神科)の月二回の往診があり、その他家族・本人の希望する病院への受診が可能。	嘱託医に変更となる場合が多いが、皮膚科や眼科は外部受診する事もある。その場合は状態を熟知している職員が付き添う事が多いが受診後は家族に状況を報告している。家族が付き添った場合でも、家族と職員間で連絡を取り合い情報を共有している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	管理者が看護職、連携は十分とれている。又併設特養看護職とも連携はとれている。		
32	(15)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時の状態把握、退院予定日の聞き取りなど、病院関係者との情報交換や相談は出来ている。	母体の特養が地域の病院と密接な協力関係を築き情報交換もスムーズにできている。入院を回避するため看護師が状態を確認し、早めの対応を心掛けているが、入院となった場合でも、施設で対応できる範囲を伝え、対応可能な場合は早期の退院を目指している。	
33	(16)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人との話し合いは少ないが、重度化・終末期には家族と話し合いチームで支援している。	契約時には施設が対応可能な範囲を説明している。対応が困難になった場合は特養等へ移る事となるが、家族からは「最後まで見て欲しい」との希望も多いため、ターミナルの実施も検討している。(現在、1名のターミナルを実施している)	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時・事故発生時のマニュアルがあり対応は出来ているが、定期的な訓練は出来ていない。		
35	(17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的(2か月に一回)な消防・避難訓練を行っているが、地域との協力体制は築けていない。	消防訓練は年二回(夜間・昼間)実施、各部署の点検も自主的に二ヶ月に一回実施している。ただ地震や水害、崖崩れ等への対策や、近隣の自治会など地域との協力体制については今後の課題となっている。	防災や災害対策については、運営推進会議の場を利用する等、早急に地域との連携を図られたい。

自己	者 第	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人格を尊重した言葉かけ・対応が出来る。職員間でも常に注意し、対応が出来る。	食事の際、食器を下げるタイミングを早くし過ぎない、着替えは居室のドアを閉めて行なう、入浴は個別に行なう等、プライバシーや利用者のペースに配慮している。また利用者が穏やかに過ごせるよう過剰なレクリエーションや大声での会話を避けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定が出来るよう、声かけや雰囲気作りを行い働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個別性をもって一人ひとりのペースを大事に支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	職員が毛染めを手伝ったり、日常的な保清(整髪・髭そり・爪切り等)などを行い、散髪も月に二回程度行われ希望日に散髪されている。		
40	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	月に二回程度の手作りの食事では、利用者の好みに合わせ調理をしている。又その人の状態、好みに合わせ、準備や片付けをしている。	陶器の食器やランチョンマットを使用し、湯呑は各自の物を持ち込んでもらい、家庭的な雰囲気作りを工夫している。通常は調理済みの食材を暖め、利用者と一緒に配膳や片付けをしている。月二回の「手作り食事」の回数を増やす事や「おやつ作り」も検討している。	「手作り食事」や「おやつ作り」など、買い物・調理・全員での食事・片付け等、利用者が職員と一緒に「食事」を楽しめる機会が増えることを望みたい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量のチェック表を活用している。又水分摂取量の少ない方に対しては声かけ、促しを行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアを行い、又必要と思われる方は歯科衛生士による定期的な口腔ケアを受けている。		

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用し、排泄パターンの把握を行い、声かけ、トイレ誘導をしている。パットの使用枚数も減っている。	現在は自立の人が多いが、必要な場合は事前に察知できるようチェック表でパターンを掴み、声かけ、誘導している。失敗時には羞恥心に配慮し普段どおりの何気ない対応をする事を心掛けている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄チェック表を活用し、無排便の日数の確認をしている。又便秘気味の方は体操や水分摂取の促しを行っている。		
45	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	基本的に月～土曜までいつでも入浴できるようにしており、本人の希望に沿って入浴している。	入浴回数は基本的には週三回となっているが、夏場や失敗時には柔軟に対応している。また浴室が広く、一人が着替え終わって出てから次の人が入るよう配慮しているため、ゆっくりと入浴できる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夕食後すぐに就寝する人、食堂で談話したりテレビを見てから就寝する人、その人に合わせて対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬については理解出来ている。薬の自己管理が難しい方は施設で管理している		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	各個人の好み、得意な事を理解し、レクリエーションや洗濯物たたみ、食事の準備などを行ってもらい、役割作りや楽しく過ごしてもらえるよう支援している。		
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	買い物、ドライブ、散歩等、本人の希望を把握し出来るだけ外出出来るよう支援している。	前面道路は車の往来が多いため、散歩は敷地内となっているが、月に2～3回はドライブに出かけている。「自宅を点検したい」「花壇が気がかり」との利用者の希望にも応じ、個別の買い物にも対応している。	

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自分で管理されている方は自身で使用してもらい、手持ちの無い方は立て替えて使用できるようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を持たれている方もおり、他の電話や手紙のやりとりも希望に沿って支援している。		
52	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	清潔を保ちのれんなどを使用し、家庭的な雰囲気を作っているが、居室、トイレのドアが同じ作り、色の為混乱がある。(トイレには看板を使用している。)	新設である事と共有スペースの装飾を控えているため全体的にスッキリとした感じになっている。居室とトイレのドアが酷似しているため、マークの他に「トイレ」と表示し混乱を回避している。建物の周りに回遊式ベランダがあり、自由に散策もでき開放感がある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間の中で一人になれる空間はない。テレビ前のソファで気の合った方同士過ごす場所がある。		
54	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人の好みの物(タンス、椅子、生活用品等)を持参して頂き、居心地良く過ごして頂けるよう工夫をしている。	クローゼットとカーテンは作り付け、ベッドや布団はリースが多いが、テーブル、椅子、整理筆筒等は好みの物を持ち込んでいる。居室内にはイベント時の利用者のスナップ写真や家族の写真を貼り親しみを感じられるよう工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレ、浴室、食堂など手すりが設置されており安全に使用出来ている。入浴時のシャワー、湯船の温度などは職員が確認を行い、ご自身で使える方は使用されている。		